

ユイヤールは、裕福な顧客の個人邸の装飾に傾注する。これとはやや対照的に、アンドレ・ジッドとのローマ旅行を機に古典に開眼したドニは（1896）、カトリック宗教画の復興に生涯を捧げる。盟友アドリアン・ミトゥアルらの『西洋派の国粹主義とは徐々に距離を取り、モーリス・パレス率いる右翼組織アクション・フランセーズとも袂を分かた。ルーヴル美術館のポール・ジャモに接近し、翰林院に迎えられ（1932）、『宗教美術史』（1939）を上梓する。いずれもドニ後半生の「カトリック右派」としての、世俗化した共和国体制下での栄達志向を裏書きする経歴である。《正義と平和》と題する元老院天井画受注も、画家の宗教的／世俗的使命の一到達点をなす出来事だった。

コランの弟子として「外光派」風の油彩を日本に広めた黒田清輝。ドニの理論書を日本に紹介した黒田重太郎。これら両・黒田には、フランスの大御所たちの現地での政治との抜き差しならぬ絡みは、もとより理解の埒外にあったと思しい（とはいえ晩年の清輝は、貴族院議員として美術行政の中核の位置を占めた）。だがこれら日本人関与者が、フランスの巨匠について、類例なき稀有な記録を残すこととなった。それをも加味した極東でのこれらの学術的成果が、フランス本国をはじめ、欧米の研究者にも伝達されることを、強く祈念する。

＊日仏美術学会例会、2022年12月10日「19—20世紀の天井画」オンライン実施における質疑応答での、筆者による即興のコメントの修正版を備忘録として残す。司会の高階絵里加、討論の永井隆則両氏に謝意を表す。また発表者のおふたりからは、評者の問い合わせに対して懇切なご返答を頂戴し、本稿の公表へのご了承をも頂戴した。付記して、その学恩に深謝もうしあげ。言及した一次資料や批評等は、各発表者が調査成果として例会で公表したものに依拠するが、事実関係に誤謬など残る場合、その責はあくまで本欄筆者に帰する。

連載
239

公共世俗建築天井画公費発注を前にした藝術家たち（下）

ドレフュス事件脱却から第一次世界大戦後への世俗的寓意表象の推移

稲賀繁美

京都精華大学教員、
放送大学客員教授

（承前）これはなにもフランスには限るまいが、こと公共発注には政治が最初から絡まっている。それは時に美学とも不分明に癒着する。実際、オデオン座天井画のコランの修正案（1894）では題名が「名声の女神ファーマ」に変更される。だが最終的に納品された作品には雲が棚引くばかりで、寓意像は消滅する。さらにコランが別途提案（あるいは流用？）したオペラ・コミック天井画（1897年に「井戸から出る真実」と題して下絵提出）でも、調査官ヴァールは天井画に井戸は不適切と繰り返す（1897）。だが調査官がアルマン・シルヴェストルに替わると、井戸のみ消去されて最終認可となる（1899）。シルヴェストルは、この作品が何の寓意画なのかは巧みに量した報告書を起草したが、彼が印象派擁護派だったことも、周知の事実。

こうした補助線を引くと、どうだろうか。政界と美術行政官や批評家たちの、舞台裏の淫靡な政争の実態が、ゆくりなくも浮かび上がる。コラン壁画の一件とドレフュス事件とは、表向き直接には関連しない。だが両者は微妙な前後関係のなかで平仄を合わせている。

それから30年後、モーリス・ドニの《正義と平和》（1928）がリュクサンブール宮殿・元老院の公共階段天井画として描かれる。元来はプティ・パリ宮殿螺旋階段の円蓋天井に、第一次大戦の勝利を記念して提案されていたプランの焼き直し。当初の構想では、愛国心の高揚が目的であり、巨大な三色旗の下には甲冑に身を固めた騎乗の女性が描かれていた。対独戦勝直後の1920年に別聖されたジャンヌ・ダルクに他ならない。

だがプティ・パリ宮殿の円蓋天井画はフランス美術史の沿革へと変更され、元老院完成作では、「オルレ안의処女」も消滅する。ここには、画家の宗教画志向と公共寓意表象との政治妥協の推移が透視される。

もとよりドニは、世紀末のナビ派としてイーゼル絵画からの脱却を唱え、壁面装飾の復権を狙っていた。嘗ての仲間、ボナールやヴ